



【公益財団法人ライフ・エクステンション研究所付属 永寿総合病院】
東京都台東区東上野2-23-16

- 病院長：湯浅 祐二
- 病床数：400床
- 外来患者数：1日平均約800人
- 外来患者への処方箋発行枚数：1カ月平均約10,000枚
院外処方箋発行率：約97%
- 薬剤師数：21名

(2018年5月現在)

1956年に160床でスタートした永寿総合病院は、2002年、現在地に400床の総合病院として移転して以来、台東区の中核病院として質の高い医療を提供しています。薬剤科では、病棟業務に積極的に関わるとともに、外来化学療法では保険薬局との連携にも注力しています。それらの取組みについて、薬剤科長の高島啓輔先生、係長の花井誉先生、主任の渡邊英恵先生、薬剤師の平井萌先生、杉富行先生に伺いました。

高齢者の多い地域にあって 安心かつ質の高い医療に貢献する

●● 薬剤科の方針と、注力する取組みをお教えてください。

高島 当院のある台東区は高齢者が多い土地柄です。薬剤科では、病院が掲げる理念「活動年齢を永らしめ、幸福な長寿に貢献する」に基づき、地域の患者さんに安心して質の高い医療を受けていただくよう尽力しています。例えば患者さんの入院時には持参薬チェックを行い、服薬コンプライアンスも含め、個々の患者さんの状況をしっかり把握するよう努めています。



薬剤科長
たかほらけい
高島 啓輔 先生

また、調剤から抗がん薬調製、病棟業務まで全スタッフで行う体制を組んでいます。幅広い業務を担う力を身に付けたうえで、各自が次の目標に向けてステップアップできるよう指導しています。

外来化学療法では、調製者の安全と患者さんの安心に十分配慮

●● 外来化学療法室を2017年11月にリニューアルされたそうですが、どのように変わったのでしょうか。

高島 外来化学療法室の拡張にあたり、調製後の抗がん薬の運搬及び患者指導の利便性を考え、隣接して調製室を設けました。準備段階では、調

写真



外来化学療法室に隣接して設けた調製室にはアイソレーターを導入し、調製時の抗がん薬曝露を極力抑えるよう配慮している。

製室のレイアウトや機材、運用などについて薬剤科内で十分に検討し、その意見が反映されています。

花井 機材では、アイソレーターを導入し、抗がん薬の曝露を極力防いで安全に調製できるよう配慮しました(写真)。現在、薬剤師全員が2人1組で

ローテーションを組んで調製業務を行っています。外来化学療法室での患者指導は、外来がん治療認定薬剤師の資格を持つ3名が担当しています。



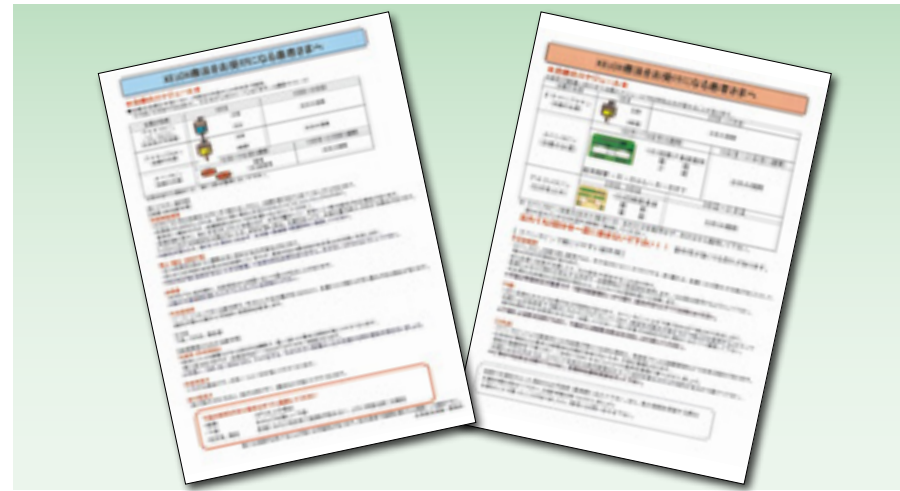
係長
花井 誉 先生

●● 外来化学療法室での患者指導は、どのように行っていますか。

渡邊 患者さんへの指導は、外来化学療法初回時及びレジメン変更時に行っています。患者さんの不安を軽減するために、副作用の対処法も含め丁寧に説明するよう心がけています。

平井 治療へのモチベーションを高めるためにも、治療目的を十分に理解していただくよう患者さんに説明し

図表 外来化学療法で使用するレジメン説明シートの例



病院用(左)は注射薬、保険薬局用(右)は経口薬を中心に、治療スケジュールや主な副作用などの説明を記載。
提供：永寿総合病院 薬剤科

ます。先が見えない薬物療法への不安を訴える患者さんには、その訴えをよく聞き、必要に応じて緩和ケア科を紹介するなど、状況をしっかり把握して対応しています。

杉 造血器腫瘍の場合は根治を目指しますので、患者さんが治療を無理なく継続できるよう、治療初期から副作用を極力防ぐべく努めています。体調変化に留意し、なかでも感染症には十分な注意を心がけています。

保険薬局とは連携ツールを活用し 外来化学療法の患者情報を共有

●● 保険薬局との連携状況をお教えてください。

杉 近隣保険薬局との合同研修会や親睦会による意見交換を重ねる中で、保険薬局から「経口抗がん薬に関する詳しい情報がほしい」「保険薬局が経口抗がん薬の実物を見せながら治療スケジュールや副作用の説明をするほうが患者さんは理解しやすいだろう」などの意見をいただきました。そこで、病院で使う注射薬と、保険薬局で使う経口用のがん化学療法レジメン説明シート(以下、説明シート：図表)を作成して共有し、それぞれで活用しています。

平井 その他にも、保険薬局との情報共有ツールとして、お薬手帳に貼るオリジナルのレジメンシールも用い

ています。

●● ツールを使った連携により、どのような成果が見られましたか。

渡邊 保険薬局からは、「説明シートによって病院側の指導を把握でき、患者さんに説明しやすくなった」と聞いています。病院側も、保険薬局での説明を想定して患者さんにお話しできるというメリットがあります。また、このようなツールや合同研修会などを通じて薬剤師同士が「顔が見える」関係になったことで、互いに相談しやすくなりました。

平井 保険薬局では、以前は注射薬を含む治療の全体像がわからなかったため、患者さんの副作用の原因を推測できないこともあったようですが、説明シートやレジメンシールを使って情報共有することで、副作用の原因



主任
渡邊 英恵 先生
外来がん治療認定薬剤師
認定実務実習指導薬剤師



薬剤師
平井 萌 先生
外来がん治療認定薬剤師
NST専門療法士

をある程度推定でき、フォローしやすくなったようです。

外来化学療法に更に深く薬剤師が 関与できるよう努めたい

●● 今後の抱負や展望をお聞かせください。

杉 担当病棟である血液内科では、がんだけでなく、感染症や緩和ケアなどの知識も求められるので、更に知識を深めるべく自己研鑽に励んでいます。

平井 外来化学療法では初回指導だけでは説明しきれないこともあります。2回目治療時以降の副作用フォローにも薬剤師が関わって

いけたらと考えています。**渡邊** 医師診察前の「薬剤師外来」は、外来化学療法への関わり方として理想的だと思います。医師の負担軽減にもつながりますので、将来的な実現に向けて、スキルアップを目指したいと思います。

花井 医療安全の推進も、薬剤師が担うべき重要な役割です。投与速度に注意が必要な薬剤などはリマインダーを貼付したり、医師や看護師と共有すべき注意事項は電子カルテ上の「掲示板」を使ったりして情報共有を図っています。今後もこのような連携を密にして、医療安全に取り組んでいきたいと思っています。

高島 がん治療では、感染症や栄養など様々な知識が求められるので、早期からこれらの教育が必要と考えています。現在、薬剤科では専門・認定資格を目指すスタッフが増えてきました。薬剤師が専門性を深めることは、患者さんのメリットにもつながります。各スタッフが切磋琢磨できるよう、後押ししたいと考えています。

現在、薬剤科では専門・認定資格を目指すスタッフが増えてきました。薬剤師が専門性を深めることは、患者さんのメリットにもつながります。各スタッフが切磋琢磨できるよう、後押ししたいと考えています。



薬剤師
杉 富行 先生
外来がん治療認定薬剤師
がん専門薬剤師